

「伝統と技術を紡ぐ架け橋」

理 事 野 毛 哲 也

令和6年度は機関士協会役員（理事・監事）改選の年であり、令和6年を通して選挙を行い、5月30日の第74回通常総会ですべての役員候補者が承認され、その後に執り行われた臨時理事会で代表理事、業務執行理事の選定が行われ、その後各理事の職務分掌（担当業務）についての割り振りが行われ、第38期新役員体制で令和7年度の協会事業運営が開始されました。通常総会で承認された令和7年度の事業計画の主たるものは海洋環境保護関連の新機軸、新技術への対応です。特に国際海運におけるGHG排出削減のための条約等のルール改正に基づく具体的な達成数値目標の実現に向けて、カーボンニュートラル技術、ゼロエミッション船の導入やLNG、メタノール、アンモニア等の代替燃料、新燃料への移行等エネルギーを取扱う機関長・士の業務に直接影響する重大な技術変革が矢継ぎ早に船の現場に現れてきています。加えてそれら新燃料を使用する二元、三元燃料機関など船用機関の技術革新、開発のスピードは目覚ましく、安全や取扱いに関するルール、指針、取扱者たる機関長・士の技量習熟度がそれらの開発のスピードに追いついていっているのだろうかという心配もあります。数十年前と比較すれば取扱うエネルギーの大きさは格段に大きくなり、機関プラントも比較にならないほどその複雑さを増してきています。機器の信頼性も格段に向上し、殆どすべてが自動制御され、何重もの安全装置が設置されているとはいえ、トラブル発生をゼロにすることは難しく、巨大なプラントが制御を失なって暴走してしまう万が一の緊急事態を常に想定した知識や技術の習得、技量習熟度の向上に重責をもって挑む事が望まれています。それは何十億円、何百億円という船の資産のみならず、自分自身

はもとより、乗組員及びその家族なども含めた安全を守るための必須の技能と言えます。戦後の昭和22(1947)年機関士協会が創立されてから再来年2027年で80周年を迎えます。その間、海運業界も何回かの大きな転換期を経験し、機関長・士も常に大きなストレスを感じながらも、「厳しい」という一言では言い表せないほど厳しい国際競争社会の中、工夫を凝らして確実に実績を積み重ね、明日を見据えて種をまいてこられた諸先輩方の不断の努力が実を結んで、海運業界のみならず国際社会からも海技者としての存在意義、技術力を認知、期待されるようになりました。また、その海技力の担い手として海運会社の基本である安全運航、効率運航の維持、海洋環境保全及び営業支援やさらに知的資源の伝承といった方面での貢献の期待度も高まっています。一方、責任も従来以上に重要となり、増大してきています。このような状況下、永劫に継続した船の安全運航、海洋環境保全を維持、達成していくためには個人、個社単位、海運業界だけでの努力では十分な成果は得られません。そこに当協会がプラットフォーム、架け橋となり、各個人、各社、業界団体を繋げ、船の運航に関わる全ての現場の経験、研究に基づく知識、知見、技術及び技能を蓄積し、情報発信、情報交換の活性化をはかり、長年築き上げてきたマリンエンジニアの伝統と技術力を紡いでいく場所としたいと思います。会員の皆様が心より誇れる団体となるよう、それぞれが考えていただきたいと思います。是非会員の皆様の正直な思いをお聞かせください。

